

第41回 長崎県子ども会伝承芸能大会(平戸大会) — 演目紹介 —

いきつきいさなとりうた 生月勇魚捕唄 ばんうた ばんうた ばんうた (1番唄・2番唄・3番唄)



【 生月勇魚捕唄保存会 】

生月勇魚捕唄は、生月島を拠点として江戸時代後期に日本最大の規模を誇った鯨組・益富(ますとみ)組の操業の中で唄われた鯨唄の総称です。益富組の本拠地だった生月町壱部浦(いちぶうら)で伝承され、昭和40年には保存会が結成されています。また、昭和53年1月14日、平戸市(旧生月町)の無形民俗文化財に指定されました。捕鯨が行われていた頃は、操業の始まりと終わり、正月などに唄と踊りが披露されていましたが、近年は、正月2日の「叩き初め」で益富家や神社などで奉納披露しています。縮太鼓(しめだいこ)を早いテンポで連打しつつ口説かれる唄は、鯨に立ち向かっていく際の闘争精神を再現したかのように勇壮なものです。日本における代表的な鯨唄として高い評価を受けていることから、全国各地数多くの公演を行っており、児童生徒の継承活動にも力をいれています。

みやのちょうししまい 宮の町獅子舞



【 宮の町獅子舞保存会 】

宮の町の獅子舞は、大正時代に町内の旅館に宿泊した讃岐の旅芸人が、当時の青年会の若衆に伝授したものといわれています。
ポピュラーな越後獅子の音楽を、三味線、太鼓で演奏しているのが特徴で、下町的な情緒をかもしています。
牡丹に遊ぶ獅子の姿を、花1名、獅子2名を一組として、多頭数で踊る姿は勇壮華麗です。
毎年10月、亀岡神社の例大祭の折に奉納踊りとして披露されているほか、地域のイベント出演などにより、地域の活性化や青少年の健全育成に寄与しています。

にほんへい まい おしき まい 二本幣の舞・折敷の舞



【 平戸神楽振興会 】

平戸神楽は、松浦家29代鎮信(しげのぶ)(天祥(てんしょう))の時代に、神職で国学者であった橋三喜(たちばなみつよし)が、正保年間(1644～1648)に全国各地の一の宮を巡拝して調査研究を重ね、24番におよぶ平戸神楽を完成させたと伝えられています。全24番は、亀岡神社の秋季例大祭(れいたいさい)(10月26日)でのみ奉納されています。
昭和62年1月8日、国の重要無形民俗文化財に指定されています。
毎年夏休み中に、神職の子どもを中心に平戸神楽後継者育成講習会を開催しており、幣束(みてぐら)を立て神の降臨を祈る二本幣と、曲芸的な技で神の御心を和め奉る折敷の舞が立派に継承されています。

ひらど 平戸のジャンガラ



【 平戸地区自安和楽保存会 】

平戸のジャンガラは、江戸時代初期にはすでに奉納されていた記録はありますが、その起源については定かではありません。近世には平戸藩の手厚い保護を受け、現在は8月11日から18日にかけて、市内9地区で奉納されています。「ジャンガラ」という名称は、鐘(かね)と太鼓の音から定着したものといわれ、華やかに飾った花笠を頭にかぶった踊り手と、腰に小太鼓を結びつけた囃子(はやし)手の組が、笛や鉦、太鼓の音が響き渡る中を軽やかに踊り歩きます。ほかに幟(のぼり)持ちや総代がつき、9地区それぞれで踊り・構成などにいくつかの違いがあります。
平成9年12月15日に国の重要無形民俗文化財に指定されており、各神社仏閣に踊りを奉納し、雨乞いや五穀豊穡を祈願します。

たすけ ふし 田助ハイヤ節



【 田助ハイヤ節保存会 】

田助ハイヤ節は平戸市北部の田助(たすけ)地区に伝わる民俗芸能で、「ハイヤ」の語源については、北に上る船が待つ「南風(はえ)」が変化したものではないかとされています。
江戸時代田助港が風待ち潮待ちの港として栄え、その船乗りたちが船宿で即興的に演奏し歌われたのが始まりとされています。太鼓と三味線による軽快なリズムに合わせ、両手に重ねた皿を鳴らしながら踊ります。各地のハイヤ系民謡の元になったものとされ平成20年2月22日に長崎県の無形民俗文化財に指定されました。
昭和42年から保存会が結成され、地域の学校でも練習が行われるなど、保存継承が図られています。